ハイデルベルク信仰問答より

問 25　ただひとりの神のみがおりますのに（申命記 6:4)、どうして父・子・み霊の三つ、というのですか。

答え　それは、神がみ言葉において、これら三つの異なった人格が一つであり、真の、永遠の神である、とそのようにご自分を、啓示されたからであります（マタイ 3:16-17)。

三位一体なる神について、もう少し突っ込んで学んでおきましょう。旧約における三位一体の啓示は暗示的であり、新約において十全に啓示されたと言えます。旧約だけで三位一体を説明するのは不十分であり、新約の証言によってはじめて暗示されていたものが明瞭になります。例えば、旧約で「主のことば」「主の知恵」と呼ばれていたものは、新約においてそれが主イエスを表していた言葉であったことが明らかにされます。

【主のことば／主の知恵】

主なる神様の「ことば」によって世界は創造され、保たれていると旧約聖書は語ります。

主のことばによって、天は造られた。天の万象もすべて、御口のいぶきによって。（詩篇 33:4-6)

また、主の「知恵」は天地創造の時からすでにそこにあり、その傍で喜び、楽しみ、創造の業に共に参与していたとも言われています。

主は、その働きを始める前から、そのみわざの初めから、わたしを得ておられた。大昔から、初めから、大地の始まりから、わたしは立てられた。深淵もまだなく、水のみなぎる源もなかったとき、わたしはすでに生まれていた。山が立てられる前に、丘より先に、わたしはすでに生まれていた。神がまだ地も野原も、この世の最初のちりも造られなかったときに。神が天を堅く立て、深淵の面に円を描かれたとき、わたしはそこにいた。神が上のほうに大空を固め、深淵の源を堅く定め、海にその境界を置き、水がその境を越えないようにし、地の基を定められたとき、わたしは神のかたわらで、これを組み立てる者であった。わたしは毎日喜び、いつも御前で楽しみ、神の地、この世界で楽しみ、人の子らを喜んだ。（箴言8:22-31)

やがて新約において、主イエスは「神のことば」として啓示されます。

- **初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。**（ヨハネ1:1-3)
- **神は、むかし父祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られましたが、この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。神は、御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれました。御子は、御使いたちよりもさらにすぐれた御名を相続されたように、それだけ御使いよりもまさるものとなられました。**（ヘブル1:1-4)

三位一体の聖書的根拠にとって決定的に重要な問題が二つあります。それは第一に「イエス・キリストの神性」、第二に「聖霊の人格性と神性」です。

①イエス・キリストの神性

(1)遣わされた者

主イエスはご自分を「神より遣わされた者」として説明しておられます。

なぜなら、わたしは神から出て来てここにいるからです。わたしは自分で来たのではなく、神がわたしを遣わしたのです。（ヨハネ 8:42／※数多くある証句から厳選して選んでいます）

(2)わたしの父

また、弟子たちとはまったく異なる意味で、神を「わたしの父」と呼んでおられます。

すべてのものが、わたしの父から、わたしに渡されています。（マタイ 11:27）

(3)「～の主」

主イエスはご自分を神と等しい権能を有する者として説明しておられます。

「律法の主」（マタイ５章「～と聞いています」「しかし、わたしは言います」）

「安息日の主」（マタイ 12:8）

「罪の赦しの主」（マルコ 2:1-12）

(4)わたしはいる

主イエスが「わたしは～である」（いのちのパン、世の光、羊の門、良い牧者、よみがえり・いのち、道・真理・いのち…等）と言われるときに用いられている言葉（エゴー・エイミ）は、出 3:14 で主なる神様がモーセにご自分を示された「わたしはいる」という言葉と一致しています。

(5)弟子たちの証言

パウロはローマ 10:13 で「**主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる**」というヨエル 2:32 の聖句を引用していますが、この「主」をイエス・キリストに充てて語っています。

また、トマスは明確に主イエスを神と呼んでいて、主イエスもその告白をそのまま受け取っています。

トマスは答えてイエスに言った。「私の主。私の神。」（ヨハネ 20:28）

②聖霊の人格性と神性

(1)遣わされた者

主イエスと同様、聖霊もまた神から遣わされた者と呼ばれています。

しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は…（ヨハネ 14:26）

このように、聖霊は父と子とは区別されながら、同時に両者と密接に関係している存在であることが分かります。

(2)主体的・人格的存在

主イエスが聖霊について語るとき、単なる「助け」とは呼ばず、「**もう一人の助け主**」（ヨハネ 14:16）と呼んでおられます。更に、聖霊は「すべてのことを探り」（Ｉコリント 2:10）、

「聞き」（ヨハネ 16:13)、「語り」（黙示 2:17)、「教え」（ヨハネ 14:26)、「祈る」（ローマ 8:26）とも言われています。

(3)神と聖霊が置き換えられている

「聖霊の宮」＝「神の神殿」（1 コリント 6:19、3:16～）

「聖霊を欺く」＝「神を欺く」（使徒 5:3,4）

(4)神と等しい属性を持つお方

聖霊は神と同じ属性を具えておられることが証言されています。

「全知」（Ｉコリント 2:10）

「全能」（Ｉコリント 12:11）

「永遠」（ヘブル 9:14）

以上のように、新約聖書は「イエス・キリストの神性」と「聖霊の人格性と神性」を明確化し、父なる神様とひとつであることを明らかにしています。旧約聖書を読むとき、そこにぼんやりと描かれた三位一体の証拠を読み取っていくのも楽しい作業です。また、新約を読むときに、旧約において芽を出していた三位一体なる神の姿がどのように明らかになってきているかを見極める作業もワクワクします。私たちは、自分の愛する人をより良く知りたいと願うものではないでしょうか。しかし、他者を 100%知り尽くすことはできず、また自分自身のことさえ 100%知ることはできません。神がどういうお方で、どれほど私たちを愛しておられるかを知ることが、聖書を読む目的と言えるでしょう。三位一体の教理を 100%理解することはできませんが、あきらめず、神を更に深く知りたいという渇望をもって取り組んでいきたいと思います。